
紅い桜の血の涙

水野光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い桜の血の涙

【Nコード】

N6490D

【作者名】

水野光

【あらすじ】

くさなぎりあ
草薙里亜は、最難関校とされる紅桜学園に入学した。期待に胸をふくらませていた里亜だったが、入学早々それが打ち碎かれてしまう。監獄のような環境の中、里亜は人生を大きく変える事になる友達と出会う。

プロローグ く桜舞うく

——白い桜が散り舞う中——

——1人の少女が走ってゆく——

ゆうに100mはあるこの桜道、別名「シャイニング・ロード」は、ある学園の土地である。その名の通り、一歩足を踏み入れればそこは楽園のような別世界。初めて見る人でも、この桜道の先にある学園がリッチであることを理解するにはそれで十分だった。

少女の名前は、里亜という。遅刻しそうという訳でもないのに、この桜道を走っていた。その表情は、生き生きとしている。

今日は、「紅桜学園」^{コウオウガクエン}の始業式兼入学式である。里亜は、今年からこの学園に入学する、新入生であった。でもそれは珍しい事だった。何故なら、この「紅桜学園」は幼稚園に入る際に「あいいうえお」さえ書けて、そこそこの成績を取れば幼稚園から高等学校までエスカレーター式で通えるのに対し、小学校や中学校から途中入学となると「偏差値75」という肩書きの付いたとんでもないハイレベルの試験を受けさせられ、毎年受かるのは10〜20人だという。

里亜も例外ではなく、3年間死ぬ気で勉強した。友達とも遊べなくて寂しかった日々。でも、その努力が報われて入

学試験に合格する事が出来た。

里亜は、これからの中学校生活に期待を膨らませていた。
この先起こる事などつゆほども知らずに・・・

プロローグ 桜舞う (後書き)

駄文で申し訳ありませんでした^^；
小説を書くことについては初心者なので、そこは暖かく見守って
いてください。

第一話 く静寂く（前書き）

一応これが一話目です。

頑張って更新しようと思います。

第一話　（静寂）

「シャイニング・ロード」を走り抜けると、門が見えてきた。門の横には、黒地に銀の文字で「紅桜学園」と書いてある。

「よしっ！」

里亜は、深呼吸をしてから門をくぐった。

「あれ？」

里亜は違和感を感じた。周りに生徒がいないのだ。

「入学式の日を間違えたとか・・・？」

でも、入学案内に書いてある日時は、確かに今日だ。

里亜は違和感を感じつつも、校舎に向かった。

そのまま歩いていくと、クラスが掲示してある張り紙の前に来た。

「2組か・・・」

里亜は、張り紙の前に人だかりが出来ていないことでも違和感を感じた。

「何で人が居ないんだろ??」

里亜は公立の小学校から来たので、幼稚な男子達が走り回ったり騒いだ

りすることに慣れていた。だから、静か過ぎて逆に怖くなった。

校舎の前まで歩いていくと、2、3人ぱらぱらと人が歩いているのが見えた

ので、里亜は安堵感を覚えた。そして、ふと校舎の脇に目をやった途端、

そこに目が釘付けとなった。

「綺麗・・・」

そこには、大きな桜が生えていた。しかし、さっきまで歩いてきたシャイニ

ング・ロードに生えているどの桜よりも美しかった。

はらはらと儂げに、薄い桃色の花びらが落ちていく様は粉雪をを連想させ

た。今にもとけてしまいそうな儂さがその桜にはあった。

そして、その桜には少なからず柳のような不気味さがあった。それも桜の

美しさを助長させる。

里亜は、その桜に目を奪われながらも「いけない！遅刻しちゃう！」と校舎

の中へ駆けていった。

第二話　　機械的

校舎の中に入ると、数メートルおきに人間が見えた。
ほっとする里亜。でも、違和感を感じた。

ぱらぱらと見えるようになった人間達は、機械的に動いているのだ。

お互いの姿に目もくれず、ただ時分の教室を指して、急かされるように・・・

（この人たち・・・不気味だ・・・）

里亜は、この学園でやっていけるのか・・・と不安になった。

とても怖かったが、勇気を奮い立たせて教室に向かった。

そして、目の前の光景を見て我が目を疑った。

自分以外の人間が、全員席についていた。

先生が来るのはまだ3分先だというのにだ。

小さい声でおしゃべりしている人たちもいるが、ごく少数派だ。

みんな、じっと前を向いていた。

（こんなところで・・・やっていけない!!）

里亜は、その場に立ちすくんだ。

すると、チャイムが鳴り始めた。

（やばっ!!）

里亜は、急いで席に着いた。

チャイムが鳴り始めると同時に、教室に中年の眼鏡の女の人が入ってくる。

「新しい担任の山之辺です。一年間よろしく。」
それだけ言うと、教室を出て行った。

（それだけ？　すごい投げやり・・・）

山之辺という教師は、すごくやる気がなさそうだった。

教師という職に絶望しているような感じで・・・

こんな教師は、少なくとも里亜の記憶の中には居なかった。

去年の担任の任那先生は、体罰教師と有名だった。

山之辺と正反対で、やる気がありすぎる先生だった。

里亜は優等生だったので平気だったが、クラスの不良たちは酷い

目に合

い、影でいろいろな事をして発散していた。

「真子虐め」もその一つ・・・

里亜には真子という親友がいた。

真子とはとびぬけて可愛いわけでもなく、少し暗くて運動音痴であ

った。

しかし、里亜に負けず劣らず成績優秀であった。

真子は内気だったので、里亜以外に友達が居なかった。

なので、あんなクラスの中で虐めに逢うのは自然だったかもしれない。

もう他人にあんな思いをさせるのは嫌だ。

何もする事もなく過去の思い出に浸っていると始業のチャイムが鳴った。

すると、さっきの山之辺と似たような中年の女性が入ってきた。こっちは眼鏡をかけていない。

（この人も、あまりやる気がなさそうね・・・）

「では中学最初の数学の授業なのでしっかり聞いてください。」

それだけ言うと早口で授業を始める。

内容は、中一ではとてもやらないような内容。

黒板の半分ほどを埋めた頃、おもむろに先生は言った。

「これから5問の応用問題を黒板に書くので各自でやってください。」

第三話 〈差別〉

それは、普通の中一どころか、高校生ですら解けるかどうか危うい問題だった。

でも、里亜を含めた5人の生徒はその問題を解いた。

5人の分を採点し終わった中年の先生は、大きな声で叫んだ。

「解けた5人の内3人は新入生じゃないのよ！あんた達恥ずかしくないの！？」

その瞬間、教室中の視線が3人に集まった。

里亜はどきつとした。

（心なしか・・・みんなの視線が冷たい気がする・・・）

「あんた達のほとんどは、この紅桜学園に小学校から通ってるのよ！それは名誉な事なの！それなのに、こんな外部の人間に負けて・・・」

（この先生・・・別小の人間を差別するんだ・・・！）
里亜は悟った。

名門私立の人間は、妙にプライドが高いという事も。

そりゃあ、高度な教育を小学校から受けさせられてる人間が、のん気に暮らしていた凡人に負けるのは屈辱であろう。
そして、先生もその気持ちを利用するのだ。

結局、小学校からエスカレーター式に大学まで居られるのだから、

必死に勉強して受験で受かって来た人になわなくても無理はないのだが・・・

チャイムが鳴り、先生が出て行くのとはほぼ同時に、里亜は3人の女子生徒に取り囲まれる。

「ちょっと勉強できるからって、調子乗らない方がいいわよ？」
そう言ってリーダー格の女子は、里亜をおもいつき睨みつけた。

「これでみんなに目えつけられたかもねえ？」
そう言って不敵に笑ったのは、一見真面目そうな女子だった。

「・・・・・・・・・・！」

里亜は、怖くて声も出せなかった。

小学校では、多くはないが友達が居たのでいじめられた経験がない。そのため、3人の怖い女子に睨まれるのはかなりの恐怖だった。

「ていうか、シカト？」

楽しそうな顔でそう言ったのは、中一の癖に化粧していて、長髪のケバいい女子だった。

「調子乗んなよ！キメェんだよ！」

「お前マジブスじゃん！」

（こんな事言われる覚えなし・・・）

里亜が黙っているので、3人は気分を害したようだった。

「何とか言えよ!？」

「無視とかマジうざいんだけど!!」

里亜はとても怖くなった。視界がぼやけてくる。

「うっわー・泣いてるんですけど。」

「マジキモッ!!」

「何泣いちゃってんの?」

より一層はやしたてる女子達。

他のクラスメイト達は、おもしろそうに見てる者、冷ややかな目で見てる者、全く無関心な者に分かれていた。

紫音と舞華を除いては・・・

第三話　く差別く（後書き）

ちよつと体験談入ってたり（笑
こういう迷惑な女子っているんですよ。

第四話　く味方く

「やばっ！そろそろチャイム鳴るじゃん！」

真面目そうな女子が叫ぶ。

「本当だ！てめえ、ちくつたら許さないからな。」

最後にリーダー格の女子が睨みつけ、3人の女子は去っていった。

その直後にチャイムが鳴り、今度はオジサンの先生が入ってきた。

ちらりと泣いている里亜の方を見たが、知らん顔で教卓に移動する。

「社会担当の園田です。一年間よろしくお願いします。」

そして挨拶の後、すぐに授業が始まった。

（・・・泣いてたって、誰も助けてくれないんだ。）

里亜は涙を拭い、授業に集中した。

また、さっきのように応用問題が出された。

里亜は全部わかったが、さっきのようにイジメに遭うのは嫌だったので答えは書かなかった。

「解けたのは4人だけか？今年の連中は駄目だなあ。」

また教室中の視線が里亜を含めた5人に集中する。

心なしか、さっきよりも冷たい気がする。

（解かなくても・・・一度注目されたらずっとこういうの・・・？）

里亜は絶望的な気持ちになった。

すると、後ろから視線を感じた。

さっきの3人かと思い、おそろおそろ振り返った。

こっちをずっと見つめている2人がいた。

（綾小路さん・・・日向さん？）

里亜が気付いた事がわかると、二人は笑いかけてきた。
無視するのは悪いので、里亜も照れながら笑い返す。

（あっいけない！）

授業に集中しなくては。ただでさえ内容は難しいのだから。

授業集中のチャイムが鳴り、先生が出て行くと、さっきのイジメっ
子3人組が目配せしてこっちに来ようとした。

里亜は怯えながら、どうか来ませんようにと祈った。

目の前に人の気配がした。

びくびくしながら顔を上げると、さっきの3人組ではなかった。

「大丈夫だよ」

「日向・・・さん。」

「名前知ってるんだ〜嬉しいなw

ちなみに、私日向舞華^{ヒナタ マイカ}って言うんだ〜よろしくね！」

日向舞華と名乗った少女は、はっとする位の美少女だった。
こげ茶色のロングヘアがとても似合っている。

「私たちは味方ですから安心して下さいね。
わたくし、綾小路紫音アヤノコウジ シオンと申します。」

綾小路紫音と名乗った少女は、眼鏡をかけていかにも優等生という感じだった。

よく見ると綺麗形の顔立ちなので、眼鏡を外せばとても美人なのだろう。

「日向さんと、綾小路さん……ですか。」

「名前で良いよ！舞華って呼んで！」

「紫音と呼んでください。後、敬語じゃなくていいですよ？」
そういうながら、紫音も敬語である。

「よろしくね！」

里亜は、この二人となら困難も乗り越えられる気がした。

でもこの後、想像を絶するような事態になるとは、この時は知る由もなかった。

第四話　く味方く（後書き）

里亜に友達が出来ました。

友達が出来ないと、どうしてもイジメの的になりますよね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6490d/>

紅い桜の血の涙

2010年10月10日02時10分発行